

序

厚生省の最近の死亡統計をみると、もつとも多いのは脳血管疾患で、それについて悪性新生物、心疾患、不慮の事故死があげてある。不慮の事故死のうち約1/3は自動車事故である。

文明の進歩はスピードを伴う。固いものが高速で移動するので外傷の機会は多くなるのは当然である。このような事情から、交通事故多発地域に救急医療センターが整備されてきた。さらに交通災害医学会や形成外科学会の活動によつて、救急医療技術にも格段の進歩が見られるようになった。また一方では自動車保険や災害保険まで出てきているが、これらは事故を予想したものであつて方向を誤っているのではないかと思う。

疾患による死亡率を減少させることは容易なことではないが、交通事故による傷害は人為的なものなので心掛け次第ではなくすことができるものである。交通事故が発生しないような対策をたてることによつて事故死の1/3は減るであろう。

しかしこれは架空の話であつて実現しそうにもない。そうとすればやはり発生した外傷をいかに処理し、命を救い、また機能障害を防止し、社会復帰させるかという現実問題になる。今回特集として「外傷」を企画したのもこのような理由からである。

耳鼻咽喉科領域として外傷の処置を行なうのは、多くの場合緊急時を過ぎてからのことであるが、最近の外傷の多様性から考えて広範囲の救急医療の知識が必要であるように思われる。諸賢のご参考となれば幸いである。

編集委員